

ルネサンス期の書齋と美德の表象

大阪芸術大学 教養課程 教授 石井元章

ルネサンス期に描かれた聖人の書齋を表す絵の一枚として、ヴィットーレ・カルパッチョ (Vittore Carpaccio 1465ca.-1525ca.) の《聖アウグスティヌスの幻視》を挙げることができる。フランチェスコ・ヴァルカノーヴァ (『カルパッチョ』篠塚二三男訳、東京書籍、1995、p. 42) によると、「聖アウグスティヌスが聖ヒエロニムスに手紙を書いていると、突然聖ヒエロニムスの声が聞こえてきて、死が迫っており天国に昇ることを告げる」場面だという。また、1956年のグイド・ペロッコ (Guido Perocco, “La scuola di S. Giorgio degli Schiavoni”, *Venezia e l’ Europa*, Venezia, 1956, pp. 221-224) 以来の研究者によれば、『神の国』を著したことで知られるこのアウグスティヌスは、多くのギリシア語文献を西方世界に紹介し、プラトン哲学を再興させた実在の人物、ニカイアの府主教ヨハネス・ベッサリオン (Johannes Bessarion 1403ca.-1472) をモデルとしているという (他説もあり)。

主題が教会博士聖アウグスティヌスであるから、画面奥のニッチには白地に赤十字の入った勝利の旗を左手に持つ勝利のキリストの金箔青銅像が当然のように置かれている。しかし、窓際には知識人のシンボルとも言える天球儀、画面右下には楽譜が置かれ、壁際の棚には古典古代の女神や馬の像、その他の古代趣味を表す青銅の小像が飾られている。これらの像は、実際の人文主義者たちの書齋では、彼らの持つ古代への強い関心を示すものであったと考えられる。そこには、キリスト教の対神徳のみならず、古代のプラトン主義に棹さす枢要徳の表現も見られる。ヴァルカノーヴァが言うように、この絵が表す聖人の書齋は、「文学や天文学、彫刻や音楽に没頭する当時の教養ある人文学者の理想化された書齋として設定されている」のである。このように、ルネサンス期の人文学者の実際の書齋は彼らの信仰や教養を裏打ちするいくつかの調度品が置かれており、その中には彫刻、特に青銅製の小像が含まれていたと考えられる。

ルネサンス期の古典古代人文学研究の中心のひとつであった大学を擁するパドヴァでは、ラッファエーレ・レージョ (Raffaele Regio 1436-1520) やニコロ・レオーニコ・トメオ (Niccolò Leonico Tomeo 1446-1531) らの人文学者がギリシア語を講じ、しかも彼らは当時パドヴァで活躍していた青銅像作家のピルゴテーレース (Pirgoteles 本名 Giovanni Giorgio Lascaris 1496-1531) やヴェネツィア共和国首席建築家のアントニオ・リッツォ (Antonio Rizzo 1430ca.-1499ca.) と交流があったことが知られてい

る。この街では、古典古代とルネサンス人文主義が緊密に結び付いていたのである。

時代を先導するフィレンツェ人彫刻家ドナテッロが15世紀中葉に11年間(1443-1454)滞在したパドヴァでは、彼の下で働いた次世代の彫刻家たちがその技術を受け継ぎ、かつ古典古代の知識をも学者と共有した。技術的にはドナテッロが生まれたフィレンツェでは一つの石膏モデルから一つの青銅像しか作れない、いわゆる「ロスト・ワックス」の手法が用いられていたのに対して、パドヴァでは一つのモデルから雄型・雌型を作り、同様の作品を数多く制作する方法が編み出された。それは同時代のパドヴァに小型の青銅像に対するかなりの需要が存在したことの証である。

『青銅の鑄造術』を著したポンポニオ・ガウリコが賞賛する彫刻家が、セヴェーロ・ダ・ラヴェンナ (Severo da Ravenna 本名 Severo Calzetta 1465-1543) である (Pomponio Gaurico, *De sculptura*, a cura di Paolo Cutolo, Napoli, Edizioni Scientiriche Italiane, 1999, p. 255)。「青銅作家、大理石作家、彫金師、木彫作家、原型作家、そして卓越した画家など、彼[セヴェーロ・ダ・ラヴェンナ]は像に関するすべての資質を自らの中に合わせ持つと私には思われます。事実、彫刻家はどうか尋ねられたら、私は、学識も兼ね備えているなら、まさにセヴェーロのような存在と答えるでしょう」とガウリコは述べる。人文主義者でありながら青銅の彫刻を制作していたガウリコによれば、セヴェーロこそが人文主義的教養を持ち、それを古代の技術である青銅の鑄造術に生かした最も優れた彫刻家であるというのである。セヴェーロの確実な作品としてパドヴァに残されているのは、イル・サント (サン・タントニオ聖堂)、聖人の礼拝堂入口に設置されている「大理石」製の《洗礼者聖ヨハネ》の像であるが、青銅像として彼に帰属された作品が多く美術館に収蔵される。例えば、アクロバティックな体付きのサテュロスのインク壺や、プラトンの『国家』に基づく枢要徳を表す小型の青銅像が見られるのである。

また、同じ系列に属する作家としてアンティーコ (L’ Antico=古代) の呼び名で知られるピエール＝ヤコポ・アラーリ＝ボナコルシ (Pier Jacopo Alari Bonacolsi 1460-1528) や、イル・リッチョ (Il Riccio=巻毛) として知られるアンドレア・ブリオスコ (Andrea Briosco 1470-1532) も多くの作品を残した。